

## 共に生きる社会を形成する

——学力国際リテラシー調査とキー・コンピテンシー——

立田 慶裕

### 要約

近年、知識や技能の習得を中心にした学力ではなく、学習の意欲から実際のな行為までを含む広く深い能力の集合体として、人の根源的特性に基づくキー・コンピテンシーという概念が提案された。この力の習得は、個人の幸福と社会の持続的発展という、ともすれば矛盾するような目的の達成を目指すものである。PISAを含む国際リテラシー調査の基底となるこの概念は、多くの国が参加した国際的な理論的研究の事業から生まれてきた。本稿では、その事業の概要とこの概念が日本の学力論のなかでどのような意義を持つかを考える。

### はじめに

二〇〇四年から、国際機関であるOECD（経済協力開発機構）は、新たな国際調査として成人能力の国際評価プログラムを検討を開始した。筆者は、生涯学習の専門家としてその国際専門家会議に参加する機会を得たが、その会議では、従来の成人教育調査で用いられてい

たりリテラシーの概念に代わって、頻繁にコンピテンス（competence）という用語が用いられていた。事実、会議の名称も成人能力ではなく、成人のコンピテンシー（Adult Competencies）という概念を基本に展開されていた。実は、すでにその会議に先立つ一九九〇年代から、OECDでは、各国が目標とする学力や成人の能力の定義を統合する試みを行っていた。一九九九年から二〇〇三年に実施された「コンピテンシーの定義と選択——理論

的・概念的基礎」プロジェクト（通称DeSeCo「デセロ」  
Definition and Selection of Competencies: the conceptual  
and theoretical foundations）は、そうした学力や能力の  
概念を国際的に整理、統合、定義しなおし、PISA（The  
Programme for International Student Assessment）や  
TIMSS（Trends in International Mathematics and  
Science Study）といった生徒を対象とした学力調査や  
成人教育の国際調査の基本概念にしようとする試みであ  
った。筆者が参加した専門家会議では、PISAを運営  
するOECD国際指標担当のシュライヒャー氏や  
DeSeCoの中心人物ライチェン氏、アメリカの教育テス  
トサービスのスタッフとの対話のなかで、国際的にコン  
ピテンスやコンピテンシーという概念についての共通理  
解がなされ、今後の調査研究の目標としている以上、私  
はその概念を理解するためにもDeSeCoの研究成果をま  
とめることにした。恐らく今後、日本の学校教育や成人  
教育を考える上でもDeSeCoで提起された鍵となる力「キ  
ー・コンピテンシー（Key Competencies）」は非常に重  
要な概念となろう。本論では、その一部を紹介すると  
ともに、DeSeCoの成果から日本の学力について若干の考  
察を試みることにしたい。

## 1 国際調査の将来に向けて

OECDは一九九〇年代後半から教育委員会を拡充  
し、教育調査研究事業に非常に大きな力を注ぎ始めた。  
特に、九七年から開始した生徒の学力到達度調査、通称  
PISAは、義務教育修了時の生徒が社会に参加するた  
めに十分な本質的な知識と技能をどの程度得ているかを  
観測する目的で始められたものである。この事業の動機  
は、次の点にあるといわれる。

第一に、各国の教育政策の方向付けにとつての重要な  
資料の提供である。これは政策的教訓を求める各国政府  
の要求に従い決定された調査枠組みや報告を伴う。第二  
に、新たな「リテラシー」の概念が提案されている。こ  
の概念に基づき設計された調査は、教科中心のこれまで  
の評価基準と異なり、PISA特有の国際的評価基準に  
基づき、いろいろな課題領域で生徒が問題に関わり、解  
決・解釈する際の効果的な分析、理由付け、伝達能力の  
把握を目的とする。第三は、生涯学習との関連で、PI  
SAは、カリキュラムや教科間にわたる生徒のコンピテ  
ンシーの評価だけに限定せず、発達の視点から、生徒  
自身の学習への動機付けや学習への信念、学習計画を報

告できるようなコンピテンシーを求めている。第四は、継続的で長期的な調査計画に基づいて、各国が重視する教育や学習の目標に見合った進歩を遂げているか測定でき、国際的な比較だけでなく、国内的にも長期的な評価を各国が行えるような設計が求められている。

PIISA調査は、読解力 (reading)、数学、科学領域での生徒の知識と技能の比較を基礎として、問題解決能力やITを活用した調査項目の追加を試みている。選択された学校教科における生徒の達成度評価から、人生の成功は、より広い範囲のコンピテンシーに左右されるということがわかってきた。そこで、PIISAを初めとする国際調査研究の進歩のためにも、新しいコンピテンシー概念の研究を行い、長期的な展望の枠組みを形成しようとしてDeSeCoが始められたのである。

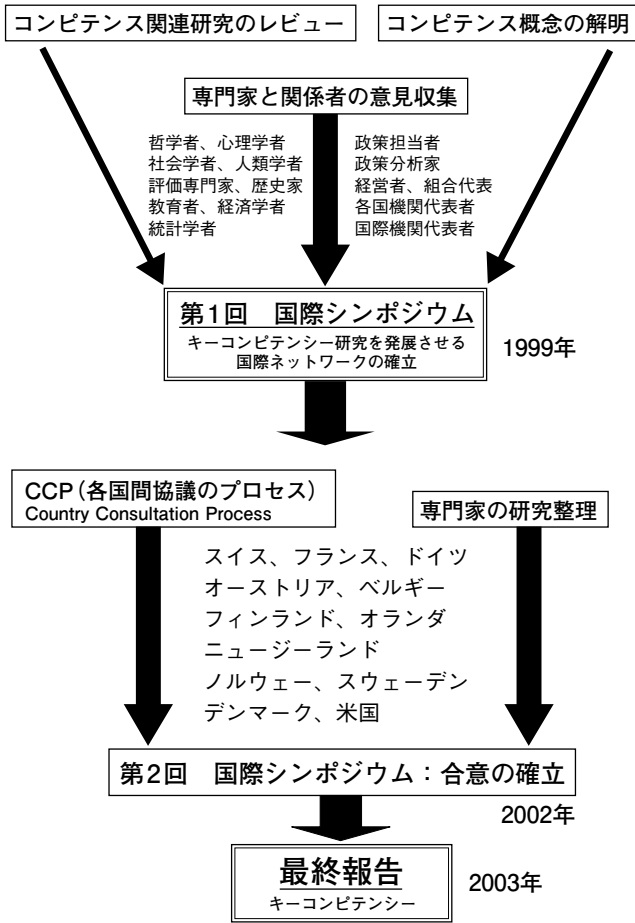
## 二 キー概念の抽出を図ったDeSeCoプロジェクト

OECDが提起して多くの加盟国が参加したDeSeCoはアメリカ合衆国教育省やカナダ統計局の支援を受けてスイス連邦統計局が主導し、一九九九年から二〇〇三年にかけて実施された事業である (図1)。

このプロジェクトの目的は、国際的に共通する能力としてのキー・コンピテンシーを理論的に基礎づけ、その評価と指標の枠組みを開発することであった。提起された問いは次の二つである。第一に、読み、書き、計算能力と別に、知識や技能以上のどんな能力 (コンピテンス) が個人を人生の成功や責任ある人生へと導き、社会の挑戦に対応できるようにするのか。なかでも、社会、経済、政治や家庭、あるいは個人の成長や人間関係を含めた生活の多様な領域に参加し、人生を成功に導く重要な能力のセットというものがあるのか。もしあれば、そのなかでも重要な鍵概念、キー・コンピテンシーをどのように理論的に正当化し、開発し、育み、評価するか。第二に、社会的・文化的な条件、あるいは年齢や性、階層、専門的活動などと関係なく、どの程度キー・コンピテンシーは普遍性を持つか。国ごとに、地域ごとに妥当性を持つか。どんな状況や場所で、若い時、職場に入り、昇進する時、家族をつくる時、引退する時など生涯の各段階でどんなコンピテンシーが特に重要となるか。

ここでコンピテンスとは、「特定の状況のなかで (技能や態度を含む)、心理社会的な資源を引き出し、動員することにより複雑な需要に応じる能力」とされ、多様な状況に対応し、各国の教育政策に共通するキーとなる複

図1 DeSeCo・プロジェクトの経緯



出典 D.S. ライチェン他著 (2006) 『キー・コンピテンス』立田慶裕監訳、明石書店。

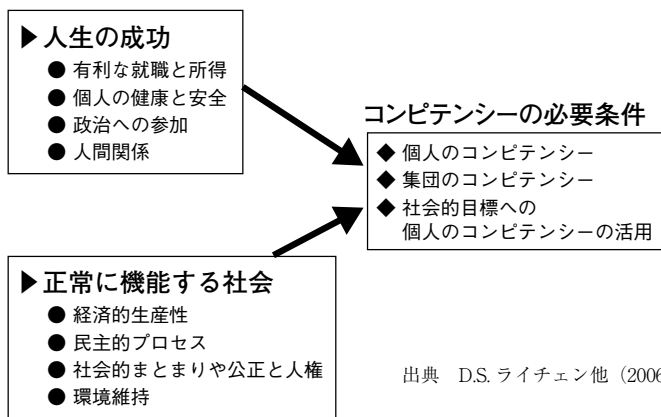
数のコンピテンシーが何か、その理論的統合が行われたのである。  
DeSeCoの特徴は、その概念定義を教育学に限定された学者や一部の国が恣意的に行うのではなく、学際的な

領域の専門家と各国の政策担当者との協働によって進めた点である。参加したOECDの一二の加盟国が、CCP (各国による事業協議とその報告)を通じて国ごとにそれぞれの教育政策の検討を行い、どのような価値や優先

政策を採っているか、またグローバルな経済的・文化的課題において重要なコンピテンシーとして共通する価値は何か、二度にわたるシンポジウムで協議されたのである。その過程で、「技術が急速に継続的に変化する世界」、「多くの多様な文化や集団と交流する世界」、「グローバル化の進む世界」が、各国に共通する世界像として捉えられた。

図1に示したように、まずコンピテンシーに関する既存の調査研究と専門家の意見の収集から始まり、各国の異なる視点を入れ、合意を得た概念枠組みをさらに強固なものにする国際シンポジウムを行った。四つの事業がプロジェクトの中心となっている。まず、コンピテンシーの先行研究の分析が行われ、これまでどんな概念が用いられて定義されてきたかを明らかにし、その結果から理論的にコンピテンシーにはかなりの非一貫性がみられることと、包括的枠組みが必要な点が指摘された。第二に、コンピテンシーの概念分類が行われ、キー概念の共通理解の構築が目的とされた。第三に、一組のキー・コンピテンシーが専門家の調査研究に基づき選択された。その際、教育学に加えて人類学から経済学など多様な学問領域の専門家や学者が加わり、政策的な関連性への配慮を行い共通基盤の発見に努力した。さらに、各国間協議を通じ

図2 個人的・社会的目標とコンピテンシー



出典 D.S. ライチェン他 (2006)

て、各国がコンピテンシーをどう定義し選択したかのレビューを行い、専門家の理論的視点と各国の優先的な教育政策との間で現実的な調整が行われた。

特に重要な点は、各国がどのような価値や目標を共有するかである。コンピテンシーに共有する価値として、すべての加盟国は、民主的な価値の重要性と持続的な発展の達成という点では合意している。その価値を、個人ができる限り実現する一方、他人や他国への敬意を伴いながら、できる限り公正で正常に機能する社会を形成できる能力が重要となる。この個人的目標と社会的目標の相補性は、個人の自律的な発達と他者との相互作用の両方を認めたコンピテンシーの枠組みに反映される。多くの加盟国では社会的な適応だけでなく、自発的で自己決定的、革新的で独創的な力が期待されている。教えられた知識の繰り返しではなく、課題解決にも取り組める個人の能力の、より優れた発達という点でも合意がみられた。こうして正常に機能する社会を形成し、人生の成功につなげることが目標として設定された(図2)。

### 三 三つのキー・コンピテンシー

#### 1 コンピテンシスの定義と条件

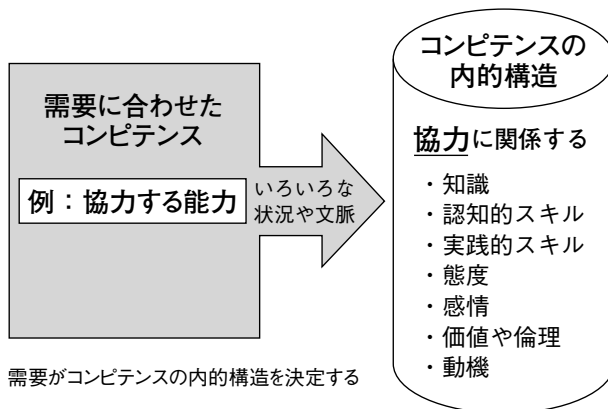
コンピテンスという考え方はホリスティックな(総合的な)概念であり、理性と感情が生命上関連しあっている

という考え方から生まれている。また、個人のコンピテンスは、動機付けから態度や技能、知識とその活用にある構成要素からなる資源を持つだけでなく、資源を必要に応じて、複雑な状況でも適切に活用する能力を含む(図3)。コンピテンシーは、このコンピテンスの集合的概念であり、キー・コンピテンシーは、そうしたコンピテンシーのなかでもさらに重要な概念である。コンピテンスは個人の属性とその人が働きかける文脈との相互作用の産物であり、その習得により社会や個人にとって価値ある成果が得られ、多様な状況における重要な課題への対応の助けとなり、すべての個人にとって重要な力となる。こうして、キー・コンピテンシーとして、図4に示した三つのカテゴリーが選択された。

#### 2 三つのキー・コンピテンシー

キー・コンピテンシーの核心には、思慮深さ(反省性: *reflectiveness*)がある。思慮深く考えるとは、考える主体が相手の立場にたつことだけでなく、メタ認知的な技能(考えることを考える)、批判的なスタンス、創造的な能力の活用が重視され、ある程度の社会的成熟も求められる。思慮深く考えるには社会的な抑圧から一定の距離を置き、異なる視点をもつことが必要であり、自主的な

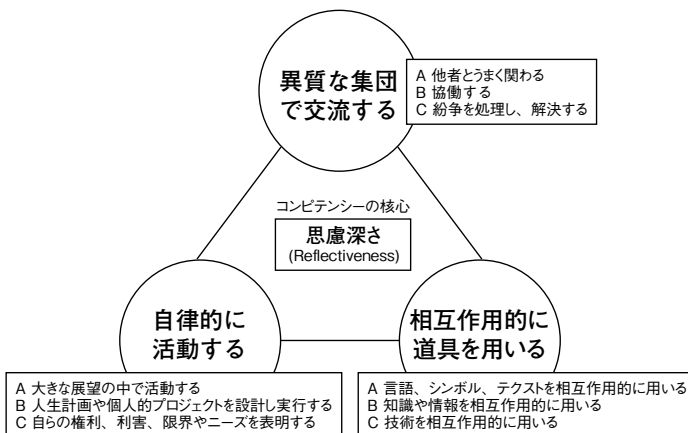
図3 コンピテンスの構成



出典 D.S. ライチェン他 (2006)

判断と自己責任の機会が与えられるにしたがい、この力は育っていく(図4)。

図4 3つのキー・コンピテンシー



急激な進歩が続き、グローバル化が進むこの時代や社会  
 (カテゴリー) 道具を相互作用的に用いる力  
 ▼必要な理由…このコンピテンシーは、知識や技術の

では、最新の技術を学習し続けること、自分の目的に道具を合わせることで、世界と活発な対話をすることが重要のため、必要とされる。

▼具体的な能力…道具は、「人が積極的な対話を行う装置」と捉えられ、コンピュータのような物理的なものだけでなく、知識や情報、技術といったものも文化的な道具と考えられる。その時、人が世界や他者と対話し、相互作用する方法をこれらの道具がどのように変化させるか、また目標を達成するためにどのように活用できるかの理解も重要となる。つまり、道具は、単なる受動的な装置ではなく、周りの環境と積極的な対話を行う装置なのである。「リテラシー」という用語は、このキー・コンピテンシーと関係する。

【1A 言語、記号、テキストを相互作用的に用いる能力】

さまざまな状況で話し書くといった言語スキルや、記号や図表の活用を含む数学的なスキルがここに含まれる。ただし、そうしたスキルはまた、社会や職場でよりよく働き、他の人々との効果的な対話に参加するための必須の道具であるともいえる。PISAの読解力(reading literacy)と数学リテラシー(mathematical literacy)や計算リテラシー(numeracy)はこのキー・

コンピテンシーを具体化したものである。

【1B 知識や情報を相互作用的に用いる能力】

サービス産業や情報産業分野の拡大、そして知識基盤社会のなかで、知識と情報を相互作用的なネットワークのなかで活用することは必須の力となりつつある。このキー・コンピテンシーに必要なのは、知識や情報の性質、その技術的基盤や社会的、文化的、思想的な背景や影響について考える力である。情報能力は、選択肢の理解、意見の形成、意思決定において責任をもって行う多様な活動の基礎である。具体的なコンピテンシーとして、科学的な探求活動にどれだけ進んで参加し交流しているか、科学的な疑問にどれだけ関心をもっているかといった科学的リテラシーがある。その他の例として、

例▽わかっていないことを知り、何をすべきか決定する、▽適切な情報源を探し、発見する、▽情報源に加えてその情報の質、適切さ、価値を評価する、▽知識と情報を整理する、などの力がある。

【1C 技術を相互作用的に用いる能力】

技術革新は職場の内外で個人に新しい技術の学習を求めただけでなく、技術の進歩自体が新しい学習法や学習機会を人々に提供している。対話などの相互作用への技術の活用は新しい手法への注意を促し、その手法を日々



の生活に活用できることも示す。膨大な情報量をたやすく利用でき、場所にかかわらず働き、世界中の人々と対話する可能性をもたらす。しかし、基礎的な技能の学習だけでなく、技術の潜在的な可能性を考えれば、私たちは自分たちの問題や目標に関連づけ、共通の実践や問題解決に技術を役立てることができるといえる。

### 〈カテゴリー2〉異質な集団で交流する力

▼必要な理由…私たちが価値や文化の多元化が進む社会に生きており、そこで豊かで円滑な生活を送るためにも、他者への思いやりと理解を深める力や、人間関係の形成と運営を良好に行える力が重要となってきたからである。

▼具体的な能力…人生を通じ、人は他者との絆に依存する。そこで、この力が個人に求めるのは、他者と共に学び、働き、円滑に交流することである。家族や地域といった既存の社会的な絆が弱められ、断片化と多様化の進む時代に、新しい人間関係を形づくったり、その良好な管理を図る力は、個人にとっても新しい社会をつくる上でもいっそう重要である。社会的能力、ソーシャルスキル、異文化間能力、柔軟性などの用語と関係する多くの特徴を持ち、その具体的な能力として次のものがある。

#### 【2A 他者と良好な関係を作る能力】

人間関係をつくるだけでなく、その維持や管理も行う力である。家庭や職場、地域での良好な関係づくりはその絆の強化を含めて、社会的・経済的成功の条件でもあり、情動的な知性をも企業は重視している。自分に快適な環境をつくるには他者の価値観や信念、存在を尊敬し評価するだけでなく、他者から学んで成長することも重要な力である。他者と良好な関係をつくる力には、次のようなものがある。

例▽共感性…他者の立場にたち、その観点から状況を想像する。これは内省を促し、広い範囲の意見や信念を考える時、自分にとって当然だと思いう状況が他の人に必ずしも共有されるわけではないことに気づかせる。▽感情の効果的なマネージメント…自分のことに気づき、自分の基本的な情動と意欲の状態と他の人の状態を効果的に読み取る。

#### 【2B 協力する能力】

個人単独で対処できないような要求と目標に対し、チームや市民運動、経営組織や政党、労働組合など同じ利害を共有する人々のグループで力をあわせる必要がある。そうした協力に必要なのは、メンバーが一定の資質を持って、集団の目標や関わりと仕事の優先順序を調整

し、役割分担しながら他者と助け合う力である。

例▽自分のアイデアを出し、他人の話を聴く力。▽討議の力関係を理解し、基本方針に従う。▽持続可能な協力関係をつくる力。▽交渉する力。▽反対意見を考慮し決定できる包容力。

【2C 争いを処理し、解決する能力】

家庭や学校、職場を含め、人間関係に常につきまとう現実として、争いは生活のあらゆる面にみられる。各人やグループが多様な要求、利害、目標、価値観をもつ以上、その調整をしないと対立や争いが生じる。この争いの存在を否定するよりも建設的方法で取り組む鍵は、争いを目標実現のための一つのプロセスと考えることである。対立する両者の利害や要求を考慮して、双方が利益を得られる解決策を工夫する力が重要となる。

例▽異なる立場があることを知り、現状の課題と危機にさらされている利害(例えば、権力、メリットの認識、仕事の配分、公正)について、できるだけすべての面から争いの原因と理由を分析する。▽合意できる領域と、できない領域を確認する。▽問題を再構成する。▽進んで妥協できる部分とその条件を決めながら、要求と目標の優先順位をつける。

〈カテゴリ3〉自律的に活動する力

▼必要な理由…複雑な社会で自分のアイデンティティを実現し目標を設定する、権利を行使して責任を取る、自分の環境を理解してその働きを知ることの重要性があげられる。

▼具体的な能力…自律的に活動するとは、明確な自己概念を伴い、意思を持った行為ができること、つまり決定や選択、自らの欲求や要求を実際の活動に置き換える能力である。それぞれ具体的能力として次のものがある。

【3A 大きな展望のなかで活動する力】

人は自分がどこにおり、どんな人物として生きているか、自分の行為や決定がどんな影響を持つかを社会や時代の大きなイメージのなかで知り、選択と活動を行う必要がある。

例▽歴史や社会の認識とビジョン。▽社会の理想像を自分と結びつける。その構造や文化、実践、自分が果たすべき役割や期待を理解し、法律や規則、また明文化されていない社会的規範や道徳作法、マナーや慣習を理解する。義務に関する知識は、他方で権利についての理解ともつながる。▽自分の行為の直接的・間接的な結果を知る。▽個人および共通の規範や目標に照らして行為が導く結果を考え、違う道に至る行為の選択も行う。

【3B 人生計画や個人的活動を設計し実行する力】  
このコンピテンシーでは、自分の希望や夢と可能性、そして実現可能な領域での堅実な将来展望が求められる。自分の人生を一つの物語と見なし、変化する社会や環境のなかに意味と目的を与える力である。

例▽計画を決め、目標を定める。▽知識や技術、時間、お金、人間関係などが自分が利用できる資源と必要な資源を知り、現状を評価する。▽目標の優先順位を決め、整理する。▽多様な目標に照らし必要な資源を用意する。▽過去の行いから学び、将来の成果を計画する。▽進歩をチェックし、計画の進展に応じて調整する。

【3C 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する力】  
多くの権利や要求は、法律や契約により制度的に擁護されているが、そうでない状況もある。そうした問題に対して、自身の権利や要求、利益を知り、積極的に主張して守る時、最終的には個人の力が重要となる。他方で、集団の一員としても自分が生活する地域や働く職場で、民主的な団体や地方・国の政治活動への積極的な参加などが求められる。

例▽選挙などのように自分の利害関心を理解する。▽個々のケースの基礎となる明文化された規則や原則を知る。▽承認された権利や要求を自分のものとするための

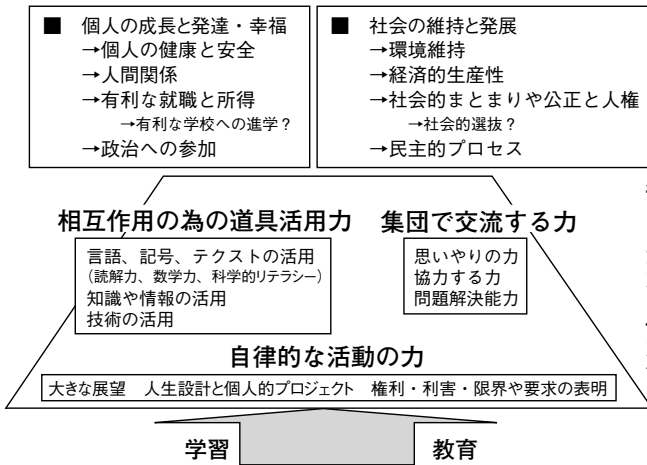
根拠を持つ。▽処理法や代替的な解決策を指示する。

以上のキー・コンピテンシーは生涯にわたり成長し変化する。加齢にしたがい、その獲得と喪失の可能性がある。各コンピテンシスの発達は青年期から成人期を通じて継続し、状況に応じて変化するが、核心部にある思慮深さだけは成熟に伴い成長すると考えられている。

#### 四 キー・コンピテンシーの学力論への示唆

DeSeCoの報告書によれば、この事業は今後の教育を考える上で本当に多くの成果をもたらした。以下、目標と評価の観点に絞って、学力論との関わりを考えていく。図5は、DeSeCoで提起されたキー・コンピテンシーの概念を個人的・社会的目標と対応させたものである。この図を見ると、国際調査を含めて現在の学力調査というものがいかに狭い視点からの評価しか行っていないかがわかる。DeSeCoで報告されたように、国際調査ではまだ、キー・コンピテンシーの道具を相互作用的に活用する力のなかでも、読解力と数学リテラシー、科学的リテラシーを含めた言語、記号、テキストを活用する力しか実証的に明らかにできていない。さらに、個人の目標に照らしても効果の多くは明らかにできていない。

図5 キー・コンピテンシーと目標の関係



(1) 個人の健康  
 個人と社会の目標の統合  
 たとえば、人生にとって健康は本当に重要なものであ

る。この健康についてのリテラシーが読解力と関連が高いことは、成人のライフスキルとリテラシー調査のなかで次第に明らかになってきている。実際の、国立教育政策研究所の健康教育に関する学校段階別の生徒意識調査の結果では、健康への意識は小・中・高と学校段階が高くなるにつれ、低下していくことが明らかになっている。同時に、これまでのいくつかの調査では、健康への関心、朝食を取ることや早寝早起きの生活習慣の有無が授業の理解度や学校生活の楽しさと関係していることがわかってきた。小学校から大学まで、子どもたちはきわめて多くのこと学び、そして特に、健康についての知識や技能も学んでいるはずであるにもかかわらず、本当に生きるための学力が形成されていないのである。

(2) 人間関係とコミュニケーション能力  
 さらに、DeSeCoで重視されている相互作用を形成して異質な集団と交流するために重要なコンピテンシーを構成する要素、すなわちコミュニケーション能力は、キャリア教育の研究のなかでも非常に重要な能力であるといわれ、厚生労働省や企業だけでなく就職活動を行う学生自身も、重要な力であることを認識している。しかし、コミュニケーション能力の測定は難しく、試験や質問紙だけでは測定できない。またその評価を教師が行うこと

には困難が伴う。

### (3) 仕事とキャリア教育

現代のように多様な職業が存在する社会では、それぞれの職業に必要な人材を補充し、個人としても職業に役立つ知識や技能、資格を身につけさせることが学校に期待される。しかし、DeSeCoの研究によると、こうした仕事に必要とされる能力をどの程度学校に期待するかは、産業の発展段階や産業構造により各国で大きな相違があるという。たとえば近年の日本の企業社会では、専門的な職業知識よりはどのような職業においても役立つような行動特性としてのコンピテンスを期待する例がみられる。だが、ドイツのような極端な例にみられるように、欧米ではむしろ個別の職業に応じた教育システムを形成する例もある。したがって、この問題はむしろ学力論というより、どのような学校や教育システムを職業にに応じて提供していくかという問題でもある。

一方、人生設計の能力は、多くの国で性別の役割分業が根強く残っていることもあり、大きな性差がみられると推測できる。実際、国立教育政策研究所のキャリア教育の調査結果でも、男女によってキャリア意識が大きく異なることが明らかにされている。つまりこの能力を巡る問題は同時に、各国の職業構造や社会構造における

性差を反映した問題ともいえる。福祉や協働に必要なケアリングや思いやりの力は、幼少期からのジェンダー形成の問題を抜きには語れないのである。

### (4) 個人の成功と成長の問題

DeSeCoで提起されたキー・コンピテンシーは、生涯にわたって成長し、衰え、状況に応じて変化することが前提とされている。

コンピテンス・レベルの発達は、子ども時代から成人期への過程を通して、個人の「知る方法」がどのように変化するかという発達心理学からの理論的観点に基づくことを提案している。コンピテンスのレベルを向上させることは精神的複雑さの緩やかな発達と関連している。青春期に、人々は抽象的に考え、価値や理想を自己反省を通して構築し、自分自身の興味を他の人やグループのものに従属させる能力をも発達させる。より高次な精神的複雑さは、成人が「社会生活に適應する圧力」から距離をおいて考えることができるときに到達するものであり、また自身の判断を形成している (Rychen, D. S. & Salganik, L.H. (Eds.) 2003, Chap. 2から訳出)

PISAや一連の国際成人リテラシー調査で明らかになった重要な発見は、一つのリテラシー能力が他のリテ

ラシー能力の発達と深い関係にあることだろう。たとえば、読書能力や読書関心の有無は、学力や健康、科学的なりテラシーなどの向上とも関連している。しかし、一度習得されたリテラシーや習慣が学校段階や発達につれて衰えたり、消滅したりすることを前提にするなら、学習の適時性の問題や効果的な習得、完全習得の研究が今後は重要となる。また、読書習慣や読書関心、読解力の調査結果をみると、小学校段階では十分な学習が行われても、中学校や高校での受験を契機にその力や習慣が弱まっていく傾向がある。また、読書については、その質や深さ、本の内容や形態も個人の発達につれ、メディアの発展につれ変化していく。個人が知識や技術を「知る方法」は、また読書だけでない。音楽やイメージの学習や力の形成にあたっては、まったく異なったメディアによる測定が必要となる。音楽や映像を含めた道具の活用力の測定と評価が困難なのはこうした問題にもある。

#### (5) 社会の機能維持と発展

これまででもそうであり、未だにその状況は続いているが、教育や学力の問題は、学校教育だけの問題として捉えられることが多い。確かに、生涯学習の視点に立ったとしても、学習の基礎は学校段階において形成される必要があるが、そこで行われた学力評価によって人々の人

生がすべて決定されていくという仮説には問題がある。従来のメリットクラシー論や学歴のマタイ効果は、教育が学校段階だけで行われることを前提としている。

しかし、進みつつある生涯学習社会の発展、学習の個人化、学校の自由化や情報通信技術の進歩を考慮した時、学校調査だけではなく、国際的な成人リテラシー調査を含めた調査研究がますます重要となってくる。生涯にわたる学力の調査研究によって、もし、高い学力を持つ者がますます幸福となり、低い学力を持つ者が不幸になるようなマタイ効果が発生しているとすれば、それを解決する実践的な戦略開発の研究が求められる。

実際、OECDでは、教育の革新的なプログラムの開発研究として、効果のある学校づくり、教師の研修プログラムの改善、多様なシナリオによる学校づくり、ICT(情報通信技術)の活用などを近年展開している。だが、こうした実践的なプログラムにおいて重要なのが、長期的な効果や短期的な効果をどう測定するかという問題であり、それがDeSeCoにおいても重要な問題として取りあげられていた。同時に、学力の効果を長期的に測定するには、各発達段階の横断的な測定だけでなく、縦断的な調査研究や個人々の追跡調査を含めた研究が必要となり、そのためには相当の費用と努力が必要とされる。ま

た、個人的な効果測定だけでなく、特定社会（国や州、市町村などの地域、企業、家族などの）の社会的効果の測定を継続的に行うためには、それぞれの社会の特性を想定した測定法や尺度の開発が求められる。

## 2 評価の基準と測定法の問題

### (1) 何を大切にするのか

DeSeCoが定義したコンピテンスやキー・コンピテンシーは、客観的な評価が可能かどうか、また評価するとしてどのような評価の基準を用いるかという問題を提起している。DeSeCoのような国際的な教育研究プロジェクトで大きな問題となったのが、宗教や言語などの文化的な背景や経済成長に伴う社会の発展状況そして歴史的な背景などから、各国における多様な価値基準の存在が明らかにされたことである。同じ国内でも、企業側と組合側で、親と教師で、民族や職業の差異によって、学段階によって、学習者の側と教育者の側によって、何を重視するかが大きく異なっているのである。当然、重視するものが異なれば、評価の基準も異なってくる。そのために、キー・コンピテンシーは群として捉えられ、必要なコンピテンシーは、星座の喩えでもって、多様な状況や社会的背景による多次元尺度のなかに位置づけられ

ると表現された。評価は一元的な尺度で行ってはならないというのである。

### (2) 知識の序列化か理解の促進か

キー・コンピテンシーが群として機能するという考え方は、各教科単位での単一尺度に基づく基準による現代の評価法への疑問を生む。特定の教科についての知識の量や情報量による評価ではなく、問題解決や人生設計、他者との関係づくりの力の形成を通じて、人間や社会を理解していくことに、教育や学習が成果を上げていくところこそが重要なのではないかと、DeSeCoは問題提起している。この評価の基準では、学問や政治、経済の世界や地域社会において、知的な資本を多く持つ者によって知的な権力の序列関係や階層関係が形成されていくという前提には立たない。そうではなく、人間関係や社会の形成に、言語や知識、情報、技術をどう活用していくかといった評価への視点が重要であり、文化資本や社会資本としての知識や技術の所有よりは、学習内容の理解や活用に評価の基準の重点を置く。また、異質な集団で交流する力の評価は、競争関係ではなく協働関係を形成できる力の評価に重点が置かれている。単に、知ることだけでなく、わかることや役立てることに評価の基準がある。評価の価値基準自体がそこでは大きく異なっている

といつてよいだろう。

(3) 学習や学校への感情

さらに、DeSeCoで将来開発される評価法において想定される課題は、キー・コンピテンシーが群として協働的な機能を果たす点を理解した上で、コンピテンスの認知的な面と非認知的な面をどのように統合し関連づけるかという点である。つまり、論理的な知性や行動特性の評価だけではなく、感情的な側面の評価、情動的な感性や行動特性をどう取り扱うかをも視野に置いている。

実際、教育や学習への動機付けという点では、学習を好きになるかどうか、学校を好きか嫌いかは非常に大きな問題である。本を読むことが楽しいと思ひ、健康な生活習慣を気持ちよくこなし、先生や親を好きになり、好きな人々との人間関係の形成を通じ、同時に社会が求める力の学習を通じて、自分自身の幸福だけでなく、他者の幸福を願ひ、そして大きな展望に立つて社会全体の発展に貢献する人間を形成する力を、今後の国際社会は求めているのではなからうか。

参考文献

(1) Rychen, D. S. & Salganik, L. H. (Eds.) (2003) *Key*

*Competencies for a Successful Life and a Well-*

*functioning Society*. Gettngen, Germany: Hogrefe & Huber

Pub. 訳書は、D. S. ライチェン他著／立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー』として明石書店から五月刊予定。

(2) 立田慶裕 (二〇〇二) 「成人の学習能力についての考察—生涯学習社会の文脈から」『日本生涯教育学会年報』二二二号、一七—三七頁。

(3) 国立教育政策研究所編 (二〇〇二) 『生きるための知識と技能—OECD生徒の学習到達度調査 (PISA)—』ぎょうせい。

(4) 立田慶裕 (二〇〇五) 「教科を越えた人生の『鍵』となる能力」の学習『教育展望』第五一卷五号、三〇—三五頁。

(5) 国立教育政策研究所 (二〇〇六) 『基礎体力の向上をめざす生涯にわたる健康教育の総合的研究』国立教育政策研究所。

(6) 立田慶裕 (二〇〇六) 「生涯にわたる読書—人はなぜ本を読むのか」赤尾勝己編『現代のエスプリ—生涯学習社会の諸相』四六六号。

(7) コンピテンシーについては、太田隆次 (一九九九) 『アメリカを救った人事革命コンピテンシー』(経営書院)、スパンサー他 (二〇〇一) 『コンピテンシー・マネジメントの展開—導入・構築・活用』(生産性出版) などが参考となる。